

嘉手納基地司令官ら、アスリートたちと交流

第18航空団広報局



(写真提供：小山 幹太氏)

県内の知的障がい者を対象とし、年間を通してスポーツ活動を提供するボランティア団体スペシャルオリンピックス（SO）日本・沖縄が主催する第5回通常総会、懇親会が2月25日（土曜日）北谷町北谷商工会ホールで開催されました。嘉手納基地代表者も招待され、第18航空団司令官マット・モロイ准将、第18任務支援群司令官ラファイール・コンスタンティーン大佐、司令官補佐官エリック・ヒメネス氏がそれぞれ家族とともに参加しました。

嘉手納基地では毎年およそ千人の知的、身体障がい者を招き、ボランティアなどを含めた参加者が6千人規模のカデナスペシャルオリンピックス大会を主催しています。一方、SO日本・沖縄のアスリートたちは、県内中部地域を中心、バスケットボール、ボウリング、陸上、水泳、ゴルフなど種目を周期的に練習をしていて、ほとんどのSO日本・沖縄所属アスリートがカデナスペシャルオリンピックス大会にも参加しています。

懇親会で挨拶にたったモロイ准将は、アスリートのためコーチや運営役員として日々ボランティア活動を推進する関係者に対し「人道的精神を象徴する皆様やボランティアの活動は、このプログラムには不可欠であり、アスリートの生活向上を手助けすることに集中し、懸命に取り組んであられる。地元沖縄のアスリートが国内大会や世界大会に出場する機会を提供下さっている。」と感謝を述べました。また「アスリートたちの『頑張ります』という気持ちが地域をつなぐ架け橋だ」としてSO活動をこれからも支援していくとしています。

挨拶の後、アスリート、コーチ、ファミリー、SO日本・沖縄関係者、基地の代表者も一緒になって輪を作り、ゲームを楽しみました。



(写真提供：小山 幹太氏)

SPECIAL OLYMPICS
NIPPON・OKINAWA

PART I

嘉手納基地司令官ら、アスリートたちと交流
ファミリーハウス「がじゅまるの家」へ日用品を寄贈
日米の小学生、スポーツで交流を深める
日米エアフォース友好協会リーダー研修団、嘉手納基地を視察
グアムでの航空機訓練移転が終了

PART II

嘉手納外語塾卒業生の門出を祝福
カデナハイスクール学校新聞
おきなわマラソンで感謝状
嘉手納基地第18航空団司令部へ「和」の贈り物
嘉手納基地の南北滑走路、補修工事を終え再開
県立高校入試及び3月11日の飛行活動自粛



CONTENTS

ファミリーハウス「がじゅまるの家」へ日用品を寄贈

第18航空団広報局

2012年2月24日、嘉手納基地にあるNon-Commissioned Officer Academy（下士官学校）の2012年第2期生及びAirmen Leadership School（航空兵リーダーシップスクール）の2012年Bクラスに在籍する研修生らが、地域支援ボランティア活動の一環として、南風原町にあるファミリーハウス「がじゅまるの家」へ日用品を寄贈しました。NCOAには嘉手納基地のみならず、太平洋の空軍基地（横田基地やアンダーセン基地など）から1等軍曹の空軍兵が集まり、6週間ほど上級下士官になる前にリーダーシップなどについて研修を受けるところです。ALSは嘉手納基地に所属する兵長や2等軍曹の隊員が研修を受ける教育機関です。

今回寄贈する物品購入の資金を捻出する、NCOAとALSの研修生らは、アメリカンプロフトボールの最大イベントとして知られるスーパー・ボウル（優勝決定戦）の日にチャリティ活動を行いました。例年、このスーパー・ボウルは世界中の人々がテレビ中継で試合を観戦し、観戦する際に好きなアメフトチームのユニフォームシャツを着る習慣があります。今回はそのユニフォームを着用する隊員から1ストライプ（1階級）ごとに1ドルの寄付を募って集めました。ストライプとは空軍で制服についている階級を示す肩章の線を指すもので、例えば兵長（4ストライプ）であれば4ドルを寄付することになります。試合を楽しんでいる軍人に募金を呼びかけて集まった800ドル余の資金でシャンプー、ボディソープ、トイレットペーパー等の日用品を購入し「がじゅまるの家」へ贈りました。

「がじゅまるの家」は隣接する子供医療センター等に離島や遠方から治療や入院する子供とその家族が利用することのできる滞在施設です。この施設はNPO法人こども医療支援わらびの会が運営しており、低価格で滞在できるようボランティアやスタッフが利用者を支援しています。

(写真：嘉手納基地広報局：當間桂子撮影)



NCO ACADEMY DONATES GIFTS TO GAJUMARU

日米の小学生、スポーツで交流を深める -- GANBATTE!

第18航空団広報局



童120人が参加し、スポーツを通じての交流会となりました。

開会にあたり、主催者の真部朗沖縄防衛局長は、「限られた時間ではありますが、参加する児童の皆さんには怪我が無いように楽しんでいただきたいと思います」と述べました。當山宏嘉手納町長は、嘉手納町が近年、実践的な英語教育やグローバルな人材育成へ取り組んでいることを紹介し、今回のイベントが「言葉や習慣の異なる日米の子供達が集い、お互いに友情を育む良い機会」であると、その趣旨を歓迎しました。

第18航空団司令官のマシュー・モロイ准将も、「私たちの今日の目標は、楽しむこと、スポーツマンシップにのっとりプレーすること、友達をつくること」と呼びかけ、この交流会が、今後も続く日米関係の発展や友情を深める機会になってほしいと述べました。

参加児童は、日米混合8チームを組み、共にドッジボール、五色綱引き、島じょーり飛ばしなどのユニークな競技に加わりました。最初は緊張した面持ちの参加者も見られましたが、競技がいざ始まると言葉の壁も乗り越え、両国のチームメイトを助け合いながらプレーしていました。

会場には、日米の参加児童を応援しようと多くの家族も来場しました。一生懸命掛け声をかけたり、熱心に写真やビデオに交流の様子を収めたりと、イベントを共に楽しみました。また、嘉手納基地から、第18任務支援群、嘉手納ハイスクール、下士官アカデミーより多数のボランティアが参加。応援席から、日本語で「ガンバッテ」や「イケル、イケル」などと声をかけ、日米の子供たちが楽しい時間を過ごせるように場を盛り上げていました。



(写真全3枚、米空軍：ジョン・ウォードリン上級曹長撮影)

い
ち
や
り
ば
ちょ
ー
で
ー
い
ち
や
り
ば
ちょ
ー
で
ー



日米エアフォース友好協会 (JAAGA) リーダー研修団、嘉手納基地を視察



第18航空団広報局

2月16日、17日の両日、日米エアフォース友好協会 (Japan-America Air Force Goodwill Association) の主催する嘉手納基地視察団が基地を訪れました。視察団は同協会の正会員(航空自衛隊OB)、法人賛助会員、個人賛助会員からなり、関東地方の参加者を中心に青森県や福岡県からも参加がありました。

研修初日、第18航空団司令官モロイ准将が参加者を歓迎し、引き続き航空団の概況説明や質疑応答が行われました。その後将校クラブで開かれた夕食会に嘉手納基地幹部も加わり、視察団のメンバーは幹部指揮官の職務や、空軍兵家族の日々の生活のこと、子供達の教育のことなど多岐にわたる話題で盛り上りました。さらに沖縄の文化にも触れる機会となつたのは、沖縄市内にある全国でも強豪道場として知られる空手道拳龍同士会の中学生による気迫のこもつた切れのある空手演武が披露されたことです。

研修2日目にはモロイ准将自らの案内で基地内を視察しました。嘉手納基地に配備されているF-15戦闘機、HH-60救難ヘリコプター、KC-135空中給油機、そして救難装備品展示を見学し、各航空機の現役パイロット、整備士、パラシュート救助員から直接説明を受けたり、広域で展開する米国空軍兵と意見交換していました。

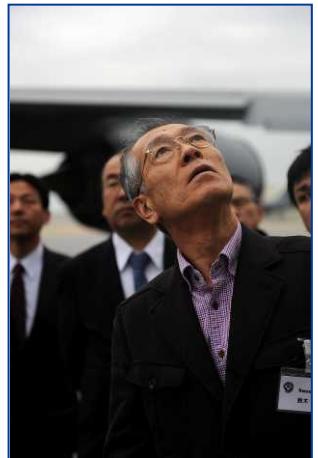
視察団員代表は夕食会で、「国家間の友好関係は個人レベルでの友好があつてこそ成り立つと思います。この研修に参加し交流の場が更なる日米友好を深めることに貢献すると強く思いました」と挨拶しました。研修後には、参加者から、「嘉手納基地の置かれた状況を理解するとともに、日米同盟の重要性を再認識するに至りました。本当に貴重な経験をさせて頂いたと感謝しております。」との感想が寄せられました。



Japan-America Air Force
Goodwill Association



(写真全て、米空軍：ブルーク・ビアーズ上等兵撮影)



グアムでの航空機訓練移転が終了

第18航空団広報局

グアムのアンダーセン空軍基地にて実施された約三週間にわたる訓練中、嘉手納基地要員は、日本そしてオーストラリアの隊員との戦略的パートナーシップを築き上げることができました。

今回、第18航空団は初めてグアムに航空機を移転し訓練を実施しました。企画担当官であるグレンデン・ウィラン少佐は、「今回の演習で、我々は飛行運用のみならず任務遂行計画、飛行運用後のブリーフィング方法、そして相互のコミュニケーションのとり方など、オーストラリアそして日本の隊員との連携を飛躍的に向上することができた」と説明しました。「今回、一番の課題とされていたのが、訓練参加者間ににおけるコミュニケーションでした。私が最も印象深く感じたことは、航空自衛隊隊員が、計画内容について彼らの間で日本語で話し合うだけでなく、我々にきちんと英語で説明したことです。今回の訓練でもっとも大変な適応調整を必要とされたのは航空自衛隊の隊員であることは間違いないことでしょう。彼らは期待以上の力を発揮してくれたと思います」と話しました。

アンダーセン空軍基地における約3週間に及ぶ航空機訓練移転中、航空運用の向上を目的とする多国間演習コープ・ノースも同時に実施されました。嘉手納基地所属の空軍兵およそ500名とF-15戦闘機18機、E-3空中管制機2機、KC-135空中給油機2機は、今年2月上旬からアンダーセン基地に派遣されていました。

ウィラン少佐は、「航空機訓練移転においてこれだけの規模で嘉手納基地の部隊を展開させたのは初めてです。今回参加した乗員 整備要員達の成果は、今後グアムで航空機訓練移転を行う際の指針となることでしょう」と話しました。ウィラン少佐によると、訓練移転中における航空機出撃回数は、F-15戦闘機で300回近く、E-3機で8回、1,000,000ポンドの燃料を同盟国航空機に給油したKC-135機は18回の出撃飛行を達成したことです。

「航空機訓練移転において、オーストラリア空軍と航空自衛隊の隊員と毎日飛行運用を行い、大規模な飛行運用も日に2回は達成できました。また、オーストラリア空軍や航空自衛隊の隊員との小規模任務飛行中に、空戦機動、対航空防勢そして対航空攻勢も行うことができました」と、ウィラン少佐は話しました

地上の運用では、嘉手納基地の整備要員や支援要員らが任務の成功を確実にしました。今回の航空機訓練移転で、第18整備群所属整備員270人以上が訓練任務を支援しました。第67航空整備部隊副隊長のライリー・ヘスターマン中尉は、「今回の航空機訓練移転を実施中、参加した整備要員全員が、広くて非常に暑い駐機場内で毎日作業を行い、パイロットや航空機乗員らが訓練に最大限取り組めるよう、万全の体制を整えてくれました」と話しました。また、「オーストラリアと日本の隊員と同じ環境で働くのは、我々整備員にとって貴重で有意義な経験となりました」と感想を述べました。



(写真全て、米空軍提供)

AVIATION TRAINING RELOCATION IN GUAM